

第二回 「私の志」小論文コンテスト

簡易作品集

主催 多摩大学

後援 高校生新聞社

平成二十二年十一月十四日

第2回

「私の志」小論文コンテスト 応募数

1,157 作品

最優秀賞

昆虫と僕

兵庫県立 小野高等学校 二年

吉水 敏城

将来は、昆虫研究者になるとというのが僕の「志」である。昆虫を研究して何をするのかというと、一番の目標は、医療分野への応用で人々に貢献したいということである。現在、治療法や薬の見つかっていない病気がたくさんある。そんな病気を未知なる部分を多く持つ昆虫という異なった視点から解決法を見つけていきたい。また、僕は昆虫を研究することで、人と生物、人と自然との関係、さらには地球環境を考えていくことができるのではないかと考えている。

そもそも、僕が昆虫に興味を持ち出したのには、ある大きなきっかけがある。小学校四年生のときである。母に博物館のセミナーの昆虫採集講座に無理矢理連れていかれた。当時の僕は、自然にはある程度関心を持っていたものの、かなり嫌がっていたのを今でも覚えている。そして今、昆虫の研究をしたいと言う僕に対して、いつもは母、「あのととき、相当嫌がっていたのにな」「あれに参加してなかったら、今のあんたはいないやろな」と言ってくる。無理矢理でも、僕にこれほど影響を与えるセミナーに行かした母には本当に感謝している。そのようにして、昆虫が大好きになり、この「志」を抱くようになった。そのセミナーで採集した昆虫は今でも覚えている。オオシオカラトンボ。紺碧の複眼、淡い青色の体。その色彩の豊かさに感動した。キオビツチバチ。脚にはえている毛の多さ。なぜ、黄色を腹に帯びているのだろうと感じた。そして、昆虫の数、種類の多さには本当に驚いた。昆虫採集を始めて、五、六年

になるが今でも採集したい昆虫はまだたくさんいる。そのように昆虫は、この世のどんな生物よりも多く存在している。そして、4億年という長い歴史の中で絶えることなく、力強く現在まで生き続けている。小さい存在ながら今まで生き残ってきた昆虫だからこそ、人々を救えるすばらしい「何か」を持っている可能性は無尽蔵に残されていると思われる。そうした、未だ知られていない部分を多く持つ昆虫。だからこそ、僕はそれを応用し、人々に役立てたい。

現在でも昆虫から数多くの役立つ物質が見つかっている。僕たちがよく嫌う「ハエ」から抗ガン剤をつくれるかもしれないという物質が発見、研究がされている。バイ菌だらけの中で暮らすハエの幼虫がなぜ病気にならず、生きていられるのかという素朴な疑問からこの物質は発見された。その他にも、半乾燥地帯に生息しているネムリユスリカという蚊の研究から、臓器や血液の乾燥保存が可能になるのではないかとこの物質が発見されている。乾季になるとこの蚊は、カラカラに乾燥して半永久的な休眠に入る。そして、水をあたえると息を吹きかえすのである。これを利用して、細胞を蘇生できる状態で乾燥保存しようというのである。これら以外にも、不思議な物質を持つ昆虫は数多くいると思う。僕はそれを研究したい。そのためにも、汚い研究や過酷な研究から目をそむけず、立ち向かっていきたい。そして、必ず人の役に立つ物質を発見する。

僕は、はじめ昆虫を研究することで人と生物、人と自然との関係、そして地球環境を考えていくことができると主張した。その理由を述べていきたい。昆虫を研究する上で、必ず採集をしなくてはいけない。その採集をする所が自然環境である。したがって、昆虫つまりは生物を研究するのに自然環境が必要不可欠なものである。僕自身、昆虫採集をする上で多くの自然に接し、そして自然への見方が変わった。昆虫採集を始める以前は、自然の樹木、花、生物にまったくと言っていいほど興味を示さず、山や川などにキャンプに行ったときでも、「自然が多いな」という呆気のない感情しかわかなかった。ところが今は、細かい自然に

目がいくようになった。たとえば、稲穂が出ている、ツクツクボウシが鳴き出した、クリの花が咲いているなどのことである。そして、自然の壮大さに感動し、さらに、「自分は生かされてんねんなあ」と感じることも多くなつたように思う。細かい自然の変化に気づき、このように感じている人がどれだけののだろうか。多くはないはずであるが、感じている人の多くは生物とふれあいがある人達ではないだろうか。昨今、昆虫嫌いが非常に多くなっているのは確かである。生物とのふれあいがなくなれば、自然から離れていくことは、明らかではないだろうか。だからこそ僕は、昆虫を研究する過程で、昆虫のすばらしさや不思議さ、そして何より「なぜ？」の答えを発見し、昆虫が身近で、大きな存在であることを、知ってもらい、昆虫に興味をもてる場ができるのではないかとと思う。そして、多くの人が昆虫、生物に眼を向け、自然に眼を向ける機会やそうしようとする意識が生まれてくるのではないかと思う。そうして、「生物は大事にしなあかん」という気持ちを持つて、人と生物、人と自然との関係を考えることにつながっていくのではないかと考えている。現在問題になつている地球温暖化を防ぐこともそう難しくはないようになつてくるはずである。また、多くの人々が昆虫に眼を向けるようになれば、昆虫研究者と医者、薬をつくる企業との連携がとりやすくなり、よりよいものができるはずだ。

だから僕は、親や自然に感謝し、昆虫を通して人々に貢献し、自然に対する意識を変え、よりよい社会をつくっていけるような研究者になることを「志」にするのである。

優秀賞

苦しみにひと区切りを

私立 学習院女子高等科 三年

山田 沙弥

犯罪者は世の不利益だ。そんなのは世間一般の常識である。法に触ればその対価として、罰金を取られたり、刑務所に入れられたり、場合によっては死刑に処せられたりする。それは誰もが当たり前として了解していることであり、それによって世の秩序は保たれているとも言える。しかし警察官に捕らえられた者が、必ずしも「犯罪者」とは限らない。このことは思いの外あまり知られていない。被疑者は敢えて疑いを持たれているだけの者であつて、検察による十分な捜査の後、裁判によって有罪判決が下されるまで、無罪の推定を受けることになっている。とすると、有罪・無罪を決定する裁判官が、勿論被告人にとつても、被害者・遺族にとつても、非常に重要な存在になつてくる。私が飛び込まんと日々努力し、目指しているのは、そんな究極の現場である。

刑事裁判の裁判官は、法廷で示された証拠のみを元に、憲法やその下にある各種法律に照らして、有罪・無罪、そして有罪の場合ほどの程度の量刑を科すかの判断をする。その判断によつては、被害者・遺族の痛みを僅かながら軽減出来る可能性がある。善良な一般市民は、しばしば此方の側に偏つた見方をしているように思われる。しかしその一方で、被告人の利益を著しく侵害し得る立場とも言える。裁判官の方々は、正しく板ばさみのような状態になつていないのでは無いかと拝察する。では何故私はそんな過酷な仕事に就きたいと考えるようになったのか。

私がしたいと思つたのは、悪者を懲らしめたり、弱い者を救つたりと

いうような、「正義のヒーロー」紛いのことでは無い。裁判官になれば、結果的に似通つたことを行う場合もあるが、私には人並み外れた正義感も、悪者と敵対する勇氣も無い。それ以前に私は、この世に根つからの悪者など居ないと考える。生まれついた時は皆同じような赤ん坊だった訳で、その後の育ち方や周りの環境によつて、一度は道を誤つたとしても、本人の努力と周囲の支えがあれば、きっと世の為人の為となれる瞬間が、再び訪れると信じている。

しかし、再犯が後を絶たないのも事実と言える。これは何とも残念である。とは言え私は絶望していない。間違えたならばまたやり直せば良い。それを被害者・遺族が許さない場合も当然ある。だから裁判はあると思う。罪を犯した者が野放しにされること、何の償いもせずのうとうと暮らし続けることには、私も断固として反対する。そんなこと世間が許すはずが無い。また必ずとは言えないが、犯罪者本人が許さない場合も少なくないはずだ。そうした時国民の代表として、個人の良心に従つて罰を与える権限を持つのが裁判官である。

私は、裁判官が行うのは悲しみに区切りを付けることだと思つ。有罪判決が出たからと言つて、殺された被害者が帰ってくる訳でも無ければ、受けた傷が癒える訳でも無い。被害者・遺族の痛みが消えることは無い。私は偽善者になるつもりは無い。ただ彼らの止め処なく溢れる悲しみに、区切りを付けることが出来たら。また罪悪感に苛まれ続ける被告人に、償いの道を示せたら、第三者としては最善なのだと思う。そしてもう一方。濡れ衣を着せられた被告人を救うのも、裁判官の務めである。無実の罪で疑われてしまった心の傷が無くなることは無いが、青天白日の身となれば、その苦しみにひと区切りをつけられるかも知れない。だから私は裁判官になりたい。

私が裁判官を目指し始めたのは、つい最近のことである。それまでも憲法や刑法を初めとした法律を読むのが好きだったので、何と無く法律関係の仕事に就ければ良いなどは考えていたが、裁判官に思い定めたの

は、自分が法律と同じように人が好きだと気付いたからである。法廷において、検察官による証拠並べが行われる中で、刑事裁判の大原則「無罪の推定」を貫くのは容易なことでは無いだろう。それに加え、裁判官はより重い刑を望む被害者・遺族の感情をも無視出来ない立ち位置に居る。双方の事情や気持ちを平等に汲み取るには、その立場の違い上アップローチは違っても、両者を同程度だけ愛するしか無いと思う。私はそれが出来る人間になりたい。

裁判官になるにはまず法科大学院に行つて、難関の司法試験を突破する必要がある。その為に私は、日々六法を中心に、関連書物を読むようにしている。平凡な高校生であるから、解説無しには分からない点も多くある。分からないのは当たり前であるし、仕方の無いことだろうから、その点については大学進学後、じっくりと学んでいけば良いと思う。

また、私が今積極的に行つているのは、刑事施設についての知識を得ることである。テレビなどでよく聞く判決に「懲役」や「禁錮」などというものがある。懲役は一定の労役を科せられながら、禁錮はその義務無く身体の自由を奪われる刑罰だが、それらの受刑者が暮らすいわゆる「刑務所」の実態については、殆ど知られていないと言えよう。私もよく知らない。行ったことが無いのだから当然だ。しかし裁判官になつて人を裁く時、刑事施設について「よく知らない」と言うのは、あまりにも無責任だと考える。自分が裁いた人の行く先くらい把握するべきである。また各刑事施設で行われている更正教育の特性を深く理解していなければ、適切な判断を下せるはずも無い。だから私は今刑事施設における受刑者の人権や、生活・食事に関する本を読むようにしている。

ただ頭では彼是と考えていても、私のようなちっぽけな人間には、出来ることなどあまり無いかも知れない。でも裁判官になつたら、前述の通り誰かの苦しみに一つの区切りを付けることが出来るかも知れない。それは被害者・遺族然り、被告人も然りである。私は今回刑事裁判の裁判官についてのみ記述したが、民事裁判についても引き続き知識を深め、

将来きつと社会に貢献出来るように、志を高く持つて努力を重ねていきたい。

優秀賞

私の進むべき道

私立 目白研心高等学校 三年

河西 麻帆

現代のグローバルな世界を生きるには、多様な文化的背景をもつ人々と共生していかなければならない。そのために「受信力」と「発信力」は不可欠な要素だ。私は教育現場、それも中学校・高等学校で海外留学を推進し、「受信力」と「発信力」を鍛える留学プログラムを作ることによって社会に貢献したい。

そのきっかけは自身の留学体験だ。異文化に触れた時、通じ合うことに喜びを感じた。相互理解は難しいことだが、その困難さも含めた楽しさと、意見交換の必要性をより多くの人に知ってもらいたいと思うようになった。

留学プログラムの中に、「自国の文化」を紹介するプレゼンテーションがあった。私は日本の国技である「相撲」を発表する班になった。話し合いで、「発表にはユーモアも入れて聴衆の心をつかもう」という意見が出た。そこで私は「折り紙で力士の人形を作るのどうか」と提案すると、班の仲間は盛り上がりそうだと私の意見を取り入れてくれた。さらに他の班員が「相撲の取り組みを実演してみるのどうか」という案を出すので、みんなも私も、視覚的で分かりやすいと賛成した。このように互いが対等に「受信」、「発信」することで私たちのプレゼンテーションの質は高まり、成功につながった。視点の異なる意見を交換しながら合意点を目指すことは、現代を生きる私たちに重要なスキルである。

しかし、私たちの「発信」にはある視点が欠落していた。それは、背

景にある精神文化の認識についてである。

たびたび起り問題視されている外国人力士の行動を例に挙げてみよう。相撲は日本人に古くから親しまれている日本の代表的なスポーツである。だから、外国人力士であっても、その言動には日本国民が抱いている精神文化を反映していることが期待される。しかし、ここ数年外国人力士は様々な社会的問題をひき起こしている。この原因の一つに相撲協会の「発信力」と、力士一人ひとりの「受信力」がうまく機能していないということがあるだろう。相撲は単に勝ち負けを競うだけの場ではなく、長い間継承されてきた日本の伝統を披露する場でもある。協会側は、力士に対して伝統に基づいて精神を教えることにより努めるべきだ。同時に外国人力士も「国技としての相撲」の精神的背景をもっと学ぶべきである。

「発信力」と「受信力」が必要とされる場面は多い。記憶に新しいのは、クロマグロの国際取引問題だ。多くの国々が、マグロを捕獲している少数派の国々に非難を浴びせた。マグロを食べ続けたいと願う日本人は、その食文化の意義を「発信」しなければならぬ立場となった。日本政府はまず、減少が叫ばれているクロマグロは、マグロ全体の漁獲量130万トンのうちわずか3万トンに過ぎないと主張した。また、1996年に「マグロ資源保存・管理特別措置法」を定め、国際機関のルールに従わない国からの輸入は禁止していることや、自国の漁獲量も厳しく規定していること等を力説した。これらの「発信力」と外交努力の結果、日本は自国の文化を守ることができた。非難されたときその正当性や必然性を主張できなければ、失うものは多い。

しかし、日本人はこのような時代に対応する準備が十分にできているだろうか。私には日本人が世界の人々を相手に対等な態度で「発信」することに不慣れだと思えてならない。

その背景として、日本がほぼ単一的民族国家であることが考えられる。つまり、日本は国民の「発信力」を伸ばせる環境と言い難い。なぜなら

大多数の人が同じ文化を共有している国内で、自明の事実を語ることはほとんどないからだ。したがって日常的には「自分が日本人である」と意識することもなく、自国についての正確な知識も意外なほど乏しい。

また「自己主張が強いのは好ましくない」という気風もある。これは日本の伝統的な精神であり、「寡黙」をよしとする考え方は今も根づいている。しかし、これからますますグローバル化する世界で、異文化の人々を相手にした時には、その文化は必ずしも世界の「徳」になるとは限らない。

このように考えてみると、私たちは現代の日本が抱える問題への対処法を身につけなければならないことが見えてくる。つまり、私たち日本人は、相手がどの国民であっても、対等に「受信」「発信」できる人間関係を築けるようになる必要がある。私は、中高の短期留学体験で、異文化をもつ相手と相互理解するには、「受信力」「発信力」が必要だと気づき、社会的視野を広めようと努力するようになった。だからこそ将来は、そのスキルを身に付けた人材を育成し、そのことによつて社会に貢献したいと強く思う。

よりよい指導をするために、大学では以下の学問を追究したい。まずコミュニケーション学だ。異文化の理解は、人と人の交流から始まるからだ。偏見なく相手を受けとめられる包容力を身につけたい。また、相互理解の道具としての語学を上達させることも忘れてはならない。次に比較社会学で、各国の国民性やそれが生まれた歴史を学ぶ。それにより、話し手の文化的背景も考慮に入れて意見を聞くことができる。教育学も重要だ。「自分は相手を尊重し、相手は自分を尊重する」という対等な関係を築ける人材を育成するための指導力を身につけたい。それは、対人関係を築くことが上手でない生徒・学生の対処にも活かすことができる。

このような知識をたくさん吸収し、より効果的な留学をコーディネートできるように努力する。そして、自分を含めた若い世代の「受信力」と「発信力」を鍛え、日本人が世界中の人々と共生する力を伸ばしてい

くことが、私の「夢」である。ひいてはそれが世界平和の一端を担うことになると信じている。

佳作

『世界の想いの発信源』

南山国際高等学校 二年 丹羽 春香

『スクリーンの奥から世界を支える』

学習院女子高等科 二年 白倉 麗

『私のなりたい先生像』

女子学院高等学校 二年 吉川 佳穂

『未来を担う子供達のために』

大妻高等学校 一年 村田 歩彌

『本当の感動』

山陽女子高等学校 二年 矢鳴 優花

『未来を拓ける技術者に』

小野高等学校 二年 計倉 圭助

『21世紀の侍へ』

早稲田大学高等学院 三年 伊澤 俊

『今伝えたい、志の素晴らしさ』

早稲田大学高等学院 三年 石原 光恭

『自分の言葉』

高田高等学校 一年 水谷 菜那子

『こえ』

高田高等学校 一年 飯田 桃子

『欲求が満たされることこそが幸せなこと』

大妻高等学校 一年 高橋 未央

入選

『心との触れ合い』

長田高等学校 二年 野村 実沙

第二回 「私の志」小論文コンテスト

平成 22 年 11 月 14 日

主催 多摩大学

後援 高校生新聞社・社団法人 全国経理教育協会
社団法人 全国工業高等学校長協会